

ふてゐるのは、即ち同文書の表面から続く前文を受けて、まさしく所謂十三者の結合のことを指したものと思はれる。

\* *electi* といふのは *dintar* 即ち波斯語の「僧」に當る語で、屢々摩尼教經典に見えるが、此の語の漢字音譯は「電達」として、British Museum 所藏のスタイン氏蒐集文書中、摩尼教禮讚文に見える。此の禮讚文は自分同館で見ることが出來ず、矢吹學士が寫眞して歸られて、第三回大藏會目錄下の末に、僅に其の項目丈けを載せたものに就て知るのみである。二三度氏に依頼してこの寫眞を一見しやうとしたが、いまだに許諾を得ないのは遺憾に堪えぬが、其の禮讚の項目中に歎諸護法明使文、子黑哆忙儼電達作と記されて居るのがそれで、子黑哆忙儼といふ電達 *tien-ta* (\**d'än-tat*, \**d'än-tar*) = *dintar* の作といふ意味だと信ずる。

此等の斷簡を漢譯本と對比して讀んで行く中に其の譯語の上から甚だ奇異に感じるのは、漢譯の惠明なる語が、トルコ語には *nom quiti t(ä)ngri* 即ち文字通りに譯すれば、法神、法威神(ル・コック氏は *Gott der Gesetzes-Majestät* と譯す)と記されて居ることである。即ち漢譯本に

第二日者即是智惠十二大王、從惠明化、像日圓滿具足記驗 (op. cit. 115 [611]) *nom quiti t(ä)ngri* に對する文が、第八文書の一に見えるが、其の惠明といふ語に對すべきものは、こゝに記した *nom quiti t(ä)ngri* であり、また漢譯本同頁の直ぐ前に記さるゝ「惠明」に對しても、同一の語が用ゐられてある。漢譯には惠明、惠明使、惠明大智等種々に書かれて居るが、要するに同一語であり、而して之が淨風、もしくは淨法風といふ語と同